

Let's give it a try!	解答例
<p>1. コミュニケーション活動において生徒の発話の正確さを向上させるためにはどのような指導が効果的か考え、その特徴（概要、利点、課題点など）をまとめなさい。</p>	<p>【活動の概要】 教科書のダイアログの一部を空所にして、ペアで完成させやり取りをさせる。全体で共有する際に、フォーカス・オン・フォーム (FoF) (30参照) を用いる。例えば、以下に示すように、リキャスト（修正的な言い返し）を行い、言語項目の形に注意を向けるようにする。</p> <p>Teacher: Where did you go on Career Day, Aki? Aki: I went to a railway company. I want to be a train conductor. Teacher: Wow. How was it? Aki: It was interesting, but I got tired. I had to learn many route, but I couldn't. Teacher: Oh, you had to learn many routes (リキャスト) . Aki: Yes.</p> <p>(New Horizon English Course 2 Unit 3 Career Day)</p> <p>【利点】 やり取りの流れを阻害することなく、言語形式に意識を向けて誤りを修正することができる。</p> <p>【課題点】 注意の向け方が暗示的であるため、学習者が自身の発話に誤りが含まれていたことに気付かない場合もある。その場合、‘What did you have to do? Say that again, please’ や、‘You had to learn many...?’ などと言って、自己修正を促すこともできる。</p>
<p>2. 中・高等学校の英語の授業における CLIL の実践例を調べ、その特徴（概要、利点、課題点など）についてグループで話し合いなさい。</p>	<p>【実践例の概要】 山崎（2016）は、普通科と併せて「外国語科」を有する高等学校の「異文化理解」（「英語で学ぶ」科目の一つ）の授業で、国際問題（エネルギー問題、生態系と人間など）を扱う CLIL を実践した。4 つの C（<u>C</u>ontent, <u>C</u>ommunication, <u>C</u>ognition, <u>C</u>ommunity）を有機的に関連付けながら統合的に育成できるよう、それぞれの‘C’にシラバスを作成し授業設計を行う重要性が示されている。</p>

【利点】

内容と言語の比重が1:1であるため、言語知識だけでなく、題材内容についての知識も向上する。他教科等の学習を支える学習スキル（精読、精聴、情報収集・整理、批判的思考など）の育成を図ることができる。

【課題】

教科学習に比べ、題材内容についてより詳細な教材研究が求められ、教師への負担が増す。山崎（2016）のように学校設定科目を有する学校とは異なり、「コミュニケーション英語」等の通常の科目のみが設定されている学校では、教科書が教科学習用のものであったり、生徒の英語力にばらつきがあるなどの問題から、実施が困難になる場合もある。

引用文献

山崎 勝（2016）「高校の英語授業への CLIL（内容言語統合型学習）の導入」『Encounters: 獨協大学外国語学部交流文化学科紀要』, 121-125.